キャラクター名
國崎光臣（くにさき みつおみ）

プレイヤー名

シンドローム	ノイマン ノイマン	ワークス	高校生	カヴァー	高校生
オプショナル		年齢	17	性別	♂
覚醒	素体	衝動	自傷	初期侵食率	32 %
出自	義理の両親	経験	大きな転機	邂逅	秘密

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値
肉体	0	1	0			1
感覚	0	0	0	1		1
精神	6	0	0	3		9
社会	2	0	0			2

HP	31
行動値	11
(非装備時)	11
戦闘移動	16
全力移動	32

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵			射撃	3		ＲＣ	2		交渉		
回避	1		知覚	1		意志			調達		
運転：			芸術：			知識：			情報：噂話	1	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
即席武器（白兵）	白兵	1r	0	9		
即席武器（射撃）	射撃	1r+3	0	9		
		0				
コンボ	射撃	13r+3		13+6+15		ｺｽﾄ14。攻撃34。全部乗せ

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

合計装甲：	0	合計回避：	0

所持品

ロイス

対象	感情(pos)	感情(neg)	タイタス	消費
義理の両親	P 純愛	N 疎外感		
片想いのあの子	P 憧憬	N 不安		
春日恭二	P 執着	N 不信感		
エリさん	P 好奇心	N 隔意		
鳴神さん	P 親近感	N 隔意		
舟生田さん	P 親近感	N 不安		
昇華)サイモン	P 執着	N 嫌悪		

最大財産P: 4	残り財産P：

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果：	非オーヴァードのエキストラ化							
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果：	コスト分のHPで復活							
即席武器(3+2)	5	2	ﾒｼﾞｬｰ	20m	ー	対決	ー	
効果：	攻撃力：+LV*2+3							
コンセントレイト：ノイマン(3)	3	2	ﾒｼﾞｬｰ	ー	ー	ー	ー	
効果：	C値をーLV							
コントロールソート(1)	1	2	ﾒｼﾞｬｰ	武器	ー	対決	ー	
効果：	選択：射撃。組み合わせで【精神】置き換え。							
急所狙い(3+2)	3	2	ﾒｼﾞｬｰ	武器	ー	対決	ー	
効果：	組み合わせで攻撃力+[LV*2]							
コンバットシステム(3+2)	3	3	ﾒ/ﾘ	ー	ー	対決	ー	
効果：	選択：射撃。判定ダイス+[LV+1]個							
虚構のナイフ(3+2)	5	3	ﾒｼﾞｬｰ	ー	ー	対決	ー	
効果：	攻撃力+LV*3							
カウンター(3+2)	2	4	ﾘｱｸｼｮﾝ	武器	単体	対決	80↑	
効果：	対象：単体の攻撃に対してのみ。シナリオLV回。							
暗号解読	★	ー	ﾒｼﾞｬｰ	至近	自身	自動	ー	
効果：	超絶的な言語センスがある。どんな未知の言語でも解読できる。							
マーキング	★	ー	ﾒｼﾞｬｰ	至近	ー	自動	ー	
効果：	オーヴァードのみが判別できるマークを残す。足跡に数式が浮かび上がる。							
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								

その日その日をなんとなく、けれど確かに平和に生きていた少年。
好きな教科があって、苦手な教科で赤点を取って
好きな食べ物を食べて、苦手な食べ物に顔を顰めて
ボールを蹴りながら笑ったり悔しがったり
ほんのり温かな気持ちを抱いたあの子に会うために、コーヒーも飲めないのに喫茶店に通ったり
高校を卒業することすらまだ遠い未来だと思っていて、大人になることも想像できなかった
当たり前が当たり前すぎて、それが急速に遠ざかることを考えもしていなかった。

「国語は無理！覚えること多すぎて頭に入りきらないって～」
「えっ、だって数学は計算するだけじゃん。計算したら公式は出てくるよ」
「今日もコーヒーがおいしい（苦い）」

オレ／お前。あんた。君。どこにでもいるちょっと思春期真っ盛りな少年。

男子校に通う男子高校生。今のところ2年生。
中学2年、3年と同じクラスだった少女にほんのり淡い恋心を抱いており、抱いたまま照れくさくて男子校に進学してしまった。
少しだけ後悔しつつも、近くの女子校に通うことになった彼女とはそもそも同じ学校には行けなかったのだ。
今は彼女がバイトをしている喫茶店に、週3で通っている。
おいしいんだよね！と言いながら、最近ちょっとコーヒーが飲めるようになって気がしなくもない。
そんな風に平凡に暮らして、校内レベルでしか特出することもないありふれた学生。
本人もそう思っていたのだが、ある日受けた血液検査で、血液型を誤認していたことを知る。
そしてその結果、両親が実の両親ではなかったのだと知った。